

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第19集

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

1 9 8 8

館 林 市 教 育 委 員 会

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHI-SHINAI

1 9 8 8

館 林 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、館林市内に所在する遺跡の発掘調査についてまとめたものである。
2. 発掘調査は、市内に所在する遺跡の緊急発掘調査である。
3. 調査は、館林市教育委員会が主体となり実施したものであり、その組織は次の通りである。

教育長	堀 越 巨
教育次長	田 村 粹 男
担当主管	館林市教育委員会 文化振興課 文化財係
文化振興課長	坂 本 充 弘
文化財係長	三 田 正 信
学芸員	岡 屋 英 治
学芸員	岡 屋 紀 子
主 事	黒 澤 文 隆 (担当)
嘱 託	藤 坂 和 延

4. 調査の期間は、昭和63年4月～平成元年3月である。
5. 調査に伴う諸経費は、国庫補助・県費補助を得て館林市が負担した。
6. 本報告書の図面作成・トレース・写真撮影・編集は、黒澤・藤坂が中心となって行った。
7. 本報告書は、伝右エ門遺跡・洲ノ上古墳・南美園町遺跡の発掘調査をまとめたものである。
8. 調査から、報告書刊行までに、諸氏・諸機関にご指導・ご教示・ご協力いただいた。感謝いたします。

本文目次

例	言	I
本文	目次	II
図版	目次	II
写真	目次	III
第I章	館林市の環境	1
第II章	各遺跡の内容	5
第1節	伝右エ門遺跡	5
第2節	洲ノ上古墳	7
第3節	南美國町遺跡	17

図版目次

第1図	館林の地勢と調査された遺跡の位置	4
第2図	館林市内の古墳	9
第3図	洲ノ上古墳調査区全体図	12
第4図	南美國町遺跡調査区全体図	19

写 真 目 次

写真 1	調 査 地 遠 景	6
写真 2	調 査 風 景	6
写真 3	ト レ ン チ 全 景	6
写真 4	湖 ノ 上 古 墳 遠 景	7
写真 5	調 査 風 景	11
写真 6	1 号 ト レ ン チ	13
写真 7	2 号 ト レ ン チ	13
写真 8	3 号 ト レ ン チ	13
写真 9	4 号 ト レ ン チ	13
写真 10	1 号 ト レ ン チ 周 濠	14
写真 11	3 号 ト レ ン チ 周 濠	14
写真 12	表 採 遺 物	14
写真 13	1 号 ト レ ン チ 出 土 遺 物	15
写真 14	2 号 ト レ ン チ 出 土 遺 物 (1)	15
写真 15	2 号 ト レ ン チ 出 土 遺 物 (2)	16
写真 16	2 号 ト レ ン チ 出 土 遺 物 (3)	16
写真 17	調 査 地 遠 景	17
写真 18	調 査 風 景	18
写真 19	1 号 ト レ ン チ	20
写真 20	2 号 ト レ ン チ	20
写真 21	3 号 ト レ ン チ	21

第 I 章 館 林 市 の 環 境

位 置 と 地 形

館林市は群馬県の南東部に位置する。北は渡良瀬川を隔てて栃木県・東は邑楽郡板倉町を経て渡良瀬川遊水地で茨城県・南は邑楽郡明和村を経て利根川で埼玉県・西は邑楽郡邑楽町とそれぞれ接している。

地形的には関東平野の北西部にあたり、台地（洪積台地・内陸古砂丘・自然堤防等）と低地（沖積低地・湿地・池沼・河川等）に大別される。

関東地方の洪積台地は、形成年代により下末吉・小原台面（約13万年前）・武蔵野面（約10万～5万年前）・立川面（約3万年前）等に分けられる。これらの台地はそれぞれ特有の堆積構造を持ち、周囲の火山より噴出した火山灰起源のローム土壌を載せている。館林市内中央部の洪積台地は「邑楽・館林台地」と呼ばれ、下末吉・小原台面に相当し、河川堆積物とされる礫・砂・シルトの互層に中部ローム層・上部ローム層を載せている。台地は比較的平坦であるが西部から東部にかけて緩やかな傾斜をみせる。標高は18～25mを測る。

洪積台地西端の多々良沼南岸には、洪積台地と比高+約5m、幅約250mの内陸古砂丘が連なる。形成年代は下末吉海進時（約12～13万年前）に通り、やはり中部ローム・上部ロームを載せている。

洪積台地の多くは沖積低地から延びる谷地により樹枝状に開折されており、浸食された台地は舌状になっているものが多い。台地面と低地面の比高差は北部は大きく、南部は小さい傾向を示す。これは関東造盆地運動の中心地が本市の南東方面にあたる埼玉県の北東部にあるためである。また、台地から低地へ移行する面には、現水田面より比高+0.5～2m程度のテラス状に広がるステージが読み取れる。

沖積低地中には大小の旧河道が残り、これに沿うように比高+0.5m内外の自然堤防が発達している。特に市内北東部の低地中の自然堤防は良く発達しており数条確認できる。

低地は、台地を取り巻くように拡がり、大きく市街地の北東部（渡良瀬川南面）と南西部（谷田川北面）の沖積低地に分けられる。この沖積低地は、河川の氾濫原と考えられ、多くの谷地や湿地が形成されている。標高は18m以下である。台地を開折する谷は、幅50m前後で、谷頭の多くは環境変化や土地の人工改変により埋没している。市内最大の谷は鶴生田川となっており、台地を南北に二分し、それに伴う浅い谷が幾つも延びている。こうした谷の中には、城沼や茂林寺沼・蛇沼等の池沼が形成され、本市の景観的な特徴となっている。

ボーリング調査からみた低地の環境変遷

ボーリング調査（試錐調査）とは、低地中に埋積している堆積物を柱状に採取するものであり、採取された試料を検査・諸分析を行うことにより古環境の推定が可能である。検査・分析の内容は、①肉眼及び実体顕微鏡による堆積物の検査 ②テフラの岩石記載的性質の検査 ③放射性炭素による年代の測定 ④珪藻化石群集の検査 ⑤花粉化石群集の検査 ⑥大型植物化石群集の検査等である。

館林市内においては、辻誠一郎氏・南木睦彦氏・小杉正人氏による茂林寺沼・古城沼・多々良沼・蛇沼等の池沼を対象に実施されたボーリング調査の検査・分析資料（『館林の池沼群と環境の変遷史 茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第2集』1986）と、辻誠一郎氏による市内北東部（渡良瀬川河川床他）の検査・分析資料があるので、沖積低地の時代別環境をみてみたい。

年 代（時代）	沖 積 低 地 の 状 況
3000年前以上 （縄文時代後期以前）	大規模な谷、河川は谷底を流れ、一部に池沼や湿原が広がる 洪積台地と沖積低地中の谷の比高差は7m以上。
3000年～2000年前頃 （縄文時代晩期）	河川の水位が下がり、谷地の中には乾燥する部分ができる。
2000年～1400年前頃 （弥生・古墳）	河川の水位は上昇し、谷底は水域及び湿原となり、堆積による埋没が始まる。
1400年～1100年前頃 （奈良時代・平安時代）	火山噴火の影響で河川の氾濫が頻繁となり谷が埋没していく。 （市内北東部の旧河道とそれに伴う自然堤防はこの時期に形成されたと推定）

平安時代以後、江戸時代の中頃までに氾濫と堆積が交互に繰り返され、台地を開折する低地の埋没が進み現在のような沖積地が形成されたと推定されている。

しかしながら、こうした環境変化は低地を中心として推定できることであり、台地上の環境変化についての推定はさけたい。

時代別遺跡分布の状況

昭和58年度より62年度にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査の結果（『館林市の遺跡』1987）を概観すると、縄文時代後・晩期から古墳時代初期にかけての遺跡と奈良時代初期の遺跡の数が極端に少ないことが特筆される。以下「館林の遺跡」により時代別の遺跡分布について述べる。（時期は各遺跡の中心となる時期である。）

旧石器時代の遺跡は3ヶ所。立地は内陸古砂丘上の斜面が多い。

縄文時代の遺跡数は19ヶ所。内訳は早期1、前期7、中期8、後期2、晩期なし、不明1であり、前期・中期が多く後期・晩期には数が激減している。立地は前期・中期が台地上の平坦面に多く、後期・晩期は台地斜面から微高地にかけてである。

弥生時代の遺跡は1ヶ所（赤生田遺跡）のみであり、数が少ないため立地の特徴は明確にすることができない。

古墳時代の遺跡は19ヶ所。内訳は前期2、中期4、後期13であり、古墳は推定を含め25ヶ所確認された。立地は前期が台地斜面から微高地、中期が斜面から台地上、後期は台地上である。古墳は総て、低地を見おろす高台に作られている。

奈良時代の遺跡は5ヶ所。立地は台地上の縁辺から台地内部に広がる。

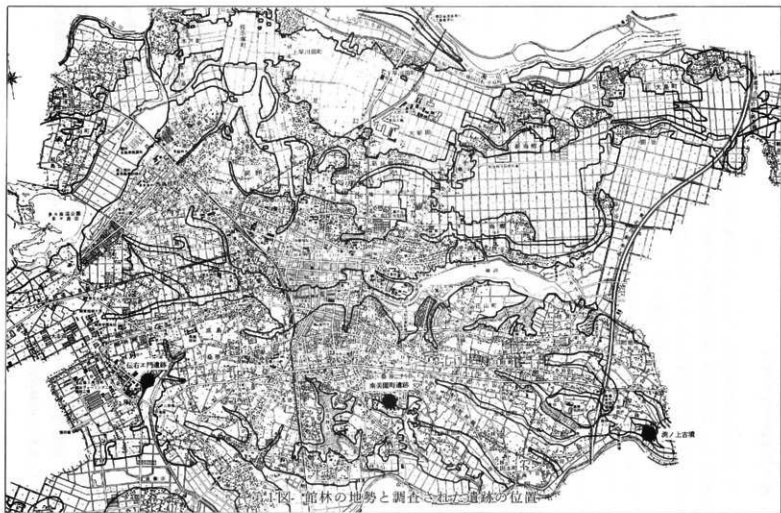
平安時代の遺跡は54ヶ所と急増する。立地は台地内部に拡がりを見せ、舌状台地全面に広がる箇所もあり、自然堤防上にも分布する。

中世は遺物の散布は確認されるが遺跡として捉えることが可能なものは少ない。城館址は伝承地16ヶ所のうち、場所の確認できるのが12ヶ所、遺構が残るのが9ヶ所である。

近世は城館址として館林城跡・近藤陣屋跡があり、館林城は21地点で遺構を残している。

こうして時代ごとの遺跡の状況をみると、前述のボーリング調査の検討・分析資料から窺える環境変化と整合する傾向がある。つまり、沖積低地底が乾燥した状態であったと推定される時期（縄文時代晩期から古墳時代前期）の遺跡数が少ないという現象である。

こうした現沖積低地中に埋没したと考えられる台地（埋没台地）については、近年古墳時代以前の遺跡群の広い意味での分布区域ではないかとする捉え方がある。例を関東平野に求めると、荒川中流域沖積低地中において弥生時代の遺構（堅穴住居1、水田址等）の検出された池上遺跡（埼玉県行田市）・利根川流域の沖積低地中より弥生時代の遺物が確認されている飯塚遺跡（埼玉県妻沼町）や上敷免遺跡（埼玉県深谷市）、群馬県内における明和村の矢島遺跡（縄文時代後・晩期）、板倉町の伊勢ノ木遺跡（古墳時代中・後期）、本市の上ノ前遺跡（縄文時代後・晩期）等が、ボーリング調査の検討・分析資料と相關する事例であり、前期の埋没台地にさらに多くの遺跡が存在する可能性を窺わせる。



第1図 館林の地勢と調査（七）直線的位置

第Ⅱ章 各遺跡の内容

第1節 伝右エ門遺跡（でんえもんいせき）

立地と環境

伝右エ門遺跡は館林市西部、群馬県立館林高等学校の南西500mに位置する。

遺跡は、近藤沼から北方に延びる開折谷の奥部を南東に望む洪積台地上に立地している。大字近藤地内にある大字成島分の飛地である字伝右エ門を中心とする遺跡である。現況は畑地となっている。

散布する遺物は、縄文時代中期・古墳時代の土師器であり、縄文時代の遺物は小範囲・古墳時代の遺物は台地全面に散布している。

既往調査は、昭和37年に群馬大学により学術調査が行われている。検出された遺構は、古墳時代前期の住居址2軒であり、甕・高杯・埴・器台・土甕・砥石等の遺物が出土している。土器形式からは石田川式に後続する4世紀末から5世紀初期のものに比定されている。（この調査については『館林市誌歴史篇』（1969）、『群馬県史資料篇2』（1986）に概要が掲載されている。）

近藤沼低地帯北岸の遺跡

近藤沼より北に延びる支谷の奥部（小さい谷が樹枝状に洪積台地を浸食する地域）には、本遺跡の他に、近藤障子遺跡（破壊）・北小袋遺跡・小袋遺跡等の遺跡が所在する。南方の近藤沼へと拡がる地域には、北近藤第一地点遺跡・苗木西遺跡等が所在する。

縄文時代の遺物が散布するのは、北小袋・小袋・北近藤第一地点・伝右エ門の4遺跡であり、散布の範囲は台地全面でなく点在である。このうち発掘調査により遺構が検出されたのは北小袋遺跡（昭和62年度調査）であり、陥し穴・集石・ピット列が検出された。全体的に見て遺跡の保存状態は良好とは言えない。

古墳時代の遺物が散布するのは、小袋・北近藤第一地点・伝右エ門・苗木西の4遺跡であり、広い範囲に散布する。発掘調査により遺構が検出されたのは、本遺跡の他には北近藤第一地点遺跡であり、国道354号道路改良工事に伴う事前発掘調査（昭和62・63年度調査）により古墳時代後期の住居址26軒・井戸址5基・掘立柱遺構2棟・鍛冶遺構2基・溝址1条、その他の緊急発掘調査により古墳時代後期から奈良時代の住居址4軒がそれぞれ検出している。土甕の出土も多く、近藤沼低地帯を控えていることから魚とりとの関係进行起させる。

その他古墳については、聴き取り調査ではダブルという土盛がかつて存在したことを窺わせるが、現況ではその形状を留めているものは見られない。

調査の概要

伝右エ門遺跡の調査は、地権者宮嶋雄幸氏の館林市大字成島字伝右エ門2899-64における個人開発に伴う事前確認調査である。

市教育委員会では、地権者より代理人を通じて申し出があった時点で遺跡の取り扱いについて協議を行うとともに現地確認を行った。

現地における保存状態は良好とは言えないが、概当地番外の遺跡地内においては多くの遺物（土師器）が散布していることが確認された。

以上のことを基に地権者側と再協議を図った結果、事前に確認調査を実施し、住居址等の遺構が検出された場合、本調査を実施するものとして了解を得た。

調査は、開発予定区域内に3本の試掘溝（幅2m）を掘り、遺構の検出を試みた。

この結果、遺構は確認できず、また遺物も特筆するものはみられなかった。

今回の調査区域は、伝右エ門遺跡の西端部にあたるため、集落の範囲外であると思われる。



写真1 調査地遠景



写真2 調査風景



写真3 トレンチ全景

第2節 測ノ上古墳（ふちのえこふん）

立地と環境

測ノ上古墳は館林市南東部、東北縦貫自動車道路館林インターチェンジ南東800mに位置する。地形的には、南は東流する谷田川、北は沖積低地から延びる浅い谷（現況では比高-1m）に挟まれた舌状台地の先端に立地している。

調査前は、羽附旭町測ノ上稲荷神社境内地であり、小高い土盛の上に社（やしろ）が置かれていた。土盛りの斜面は、南東部が緩やかで、北・西部が急であり、土地の人工改変の一端を示していた。

館林市内の古墳

『上毛古墳総覧』（1938年刊）によれば、当時市内では、館林町1基、郷谷村5基、赤羽村1基、三野谷村1基、多々良村59基の古墳が存在していたことが記録されている。ただし、この記録からは、現在の位置を明確にすることができない。

『群馬県遺跡台帳』（1973年刊）による市内の古墳は、町谷・富士山・山王山・富士嶽神社・愛宕神社古墳の5基である。



写真4 測ノ上古墳遠景

『館林市の遺跡』（1988年刊）では、市内の古墳は、推定地を含め25基を数える。内訳は、『群馬県遺跡台帳』の5基の他に、高根古墳群（5基）・日向古墳群（5基）・下志柄・町谷2号・測ノ上の3基、推定7基である。

館林市内において、発掘調査が実施されたのは、上毛古墳総覧多々良村第4号墳に比定される天神二子山古墳である。この古墳は大字高根字寺内乙108-2・3、源清寺の寺域内に所在したもので、昭和37年、館林市誌の編纂に伴い群馬大学が調査を行った。この調査により、粘土埴の内部構造と埴輪列の一部が検出された。その他、昭和59年度には山王山古墳の整備に伴い、周濠の調査が実施されている。

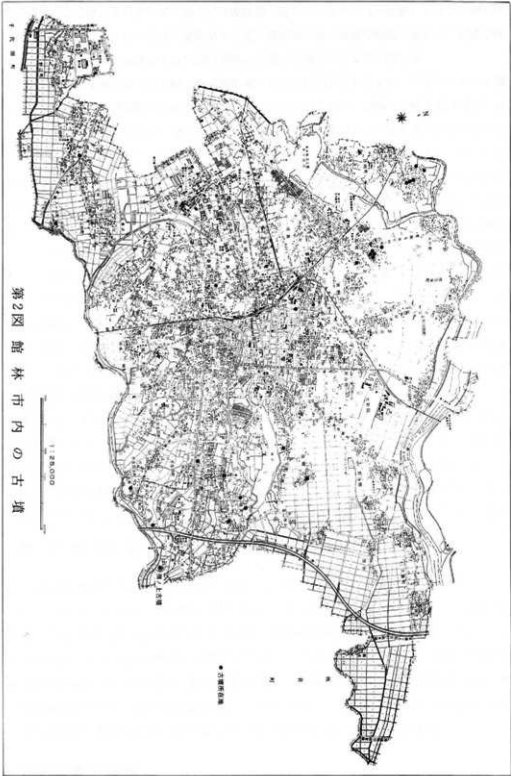
周 辺 の 遺 跡

本遺跡の所在する館林市南東部には、谷田川に連なる低地より台地を浸食する浅い谷に沿うように遺跡の分布が見られる。現旭幹線排水路となっている谷に沿って拡がる測ノ上2、下新田、測ノ上古墳の北西150mに所在する測ノ上1等の遺跡である。

また、本遺跡の北西800mには、赤生田道遺跡（破壊）が位置する。昭和45年東北縦貫自動車道路館林インターチェンジ建設に伴い群馬県教育委員会により発掘調査が行われており、古墳時代初期の住居址5軒をはじめ、平安時代の住居址・方形周溝墓等が検出されている。

隣接する地域では、板倉町岩田地区に、筑波山神社古墳・舟山古墳・道明山古墳が存在している。このうちその内容が判明しているのは筑波山神社古墳である。昭和8年神社建設に伴う墳丘の掘削により石室が発見され、その状況が写真として残っている。（『飯塚多右エ門コレクション』館林市資料館収蔵）これによると石室は、横穴式の石室であり、床面のプランは胴張りの楕円形のものと思われる。また側石に用いられた石材は筑波山神社境内に使用されており、榛名山二ツ岳が噴出した紡錘状角閃石安山岩を整形したものである。同古墳は、板倉町史編纂に伴い発掘調査されており、全長55m、後円部径32m、前方部幅35m、後円部高さ4m前後で、周囲に濠を持つ前方後円墳であることが判明した。人骨2体の他、副葬品として、大刀破片・金環・銀環・切子玉・勾玉等が出土している。埴輪片は周濠より一片出土したのみである。築造年代については、石室の石材・耳環・大刀等の編年と、埴輪を持たないことから6世紀後半～7世紀初頭に比定されている。（『板倉町史』より）

谷田川の南岸と利根川に挟まれた地域には、江黒古墳・富士嶽古墳・稲荷塚古墳（以上明和村）・松ノ木古墳が存在する。稲荷塚古墳は昭和28年群馬大学により発掘調査が行われ、胴張りのある角閃石安山岩削石による両袖形石室の存在が確認されている。（『群馬県遺跡台帳』より）



第2図 館林市内の古墳

調査に至る経過

西ノ上古墳の発掘調査は、羽附旭町区民公園の建設工事に伴う事前確認調査である。

市教育委員会では、工事計画の問い合わせがあった時点で、埋蔵文化財保護の立場から開発側と協議を開始した。当古墳は『群馬県遺跡台帳』（1973年刊）には未掲載の遺跡であり、『館林市の遺跡』（1988年刊）作成に伴う遺跡分布調査の中で発見されたものである。墳丘部の残存・墳輪片の散布が確認されており、現況（調査前）は前述の通り西ノ上稲荷神社境内地となっていた。こうしたことから、社を解体し墳丘部を掘削する前に、確認調査を実施して、古墳の真偽、範囲等を調査し、その結果を基に再協議するものとして了解を得た。

調査の内容

調査の方法は、前記のことを目的とするため、トレンチ調査とし、開発予定の地籍から周辺の地籍に亘る試掘溝を掘り下げ、周濠の検出を試みた。試掘溝の本数は、耕作状況の問題から4本とした。トレンチの内容を示すと、1号トレンチ（95番地より103番地）・2号トレンチ（95番地より94-1番地）・3号トレンチ（96番地より96-乙番地）・4号トレンチ（96-2番地より96-1番地）である。（第3図参照）1～3号トレンチは可能な限り墳丘部を掘り下げ、断面から遺構の保存状況を確認した。

1号トレンチは農道部を残して掘り下げたものであるが、この農道の内外よりローム層を深く掘り込む異なる2本の溝が検出された。農道部を残したため切り合いからの新旧関係を観察することはできなかったが、内側の溝は均一の黄褐色土であり、その年代も新しいものと思われる。外側の溝の土層は、黒褐色土であり、堆積状況から滞水していた状況が窺われた。2号トレンチからは、墳丘より5mの地点で深い掘り込みが見られたが、埋土は荒いローム粒子状のものであり、古墳と結びつくものとは思われない。2号トレンチのグランドレベルと、他のトレンチのグランドレベルとの差（約1m）から見て陸田中の土地の人工改変により周濠は破壊されてしまったものと思われる。3号トレンチからは幅2m程の溝が検出された。ローム面を約1m程掘り込んだもので、埋土は黒褐色土であり、その堆積の状況、レベルは1号トレンチ外側の溝と対応する。このことから、この2本を周濠と判断したい。4号トレンチは、96-2番地の南・東側に現存する落ち込みの地下の状況を確認するために掘り下げたものであるが、その断面から比較的新しい時期に掘られたものと判断される。現地での聴き取りでは、竹の根が抜がるのを防ぐためのものという話があったので付記しておきたい。以上のトレンチ調査で確認された2本の周濠により、東西幅30m前後の古墳であることが窺える。

墳丘部の保存状況については、断面等から見て墳丘の西部・東部の破壊が著しく、板築の状況も捉えることはできなかった。地元では遺跡地一帯をモトヤシキ（元屋敷）と呼び、現当主

より3世代前の居住地域であったと言われており、(出水を避けて現在の居住地域へ移ったと言う。) 墳丘の破壊状況を裏付けている。

出土遺物がみられたのは、2号トレンチであり、総量バンケース3箱程の埴輪片が出土した。埴輪片は形象埴輪の一部が見られた他は総て円筒埴輪であり、遺物接合された範囲から考えると、原形は高さ1m前後になるものと思われる。

以上の確認調査の結果を基に開発側と再協議の結果、社の解体時に試掘を行い、主体部が残存する場合本調査を行うものとされた。

《付 記》

社の解体時、主体部の一部と思われる粘土が確認されたため、墳丘部の発掘調査が実施された。この結果、胴張りを持つ楕円形状の横穴式石室と副葬品(直刀・耳環・鉄鏃・鉄斧・鉄製馬具)・埴輪列等が検出された。この調査報告書については、別に刊行する予定である。



写真5 調査風景

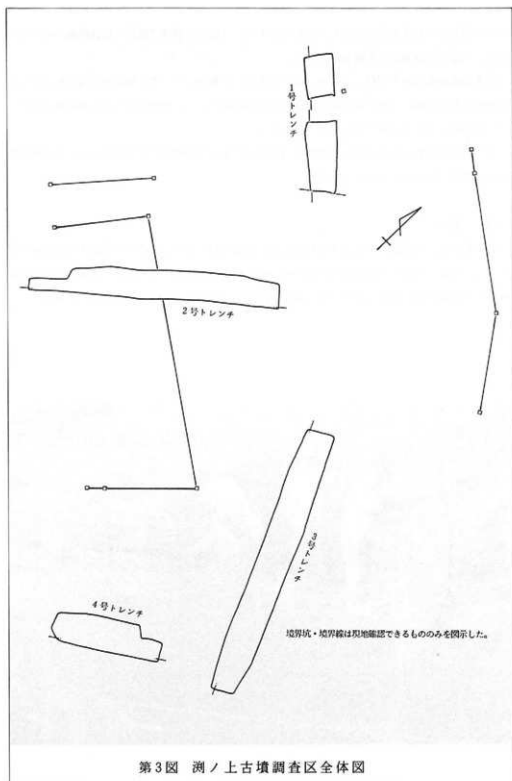




写真6 1号トレンチ



写真7 2号トレンチ



写真8 3号トレンチ



写真9 4号トレンチ



写真10
1号トレンチ周濠



写真11
3号トレンチ周濠

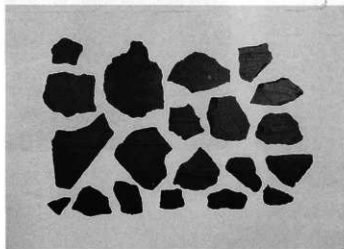


写真12
表採遺物

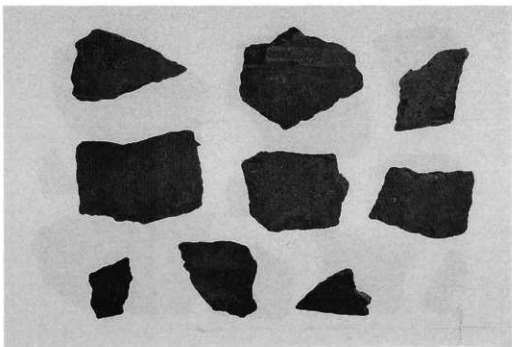


写真13 1号トレンチ出土遺物

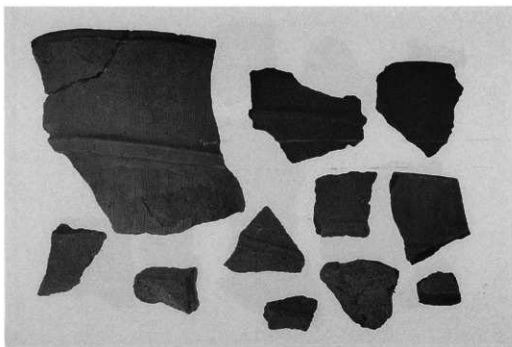


写真14 2号トレンチ出土遺物(1)

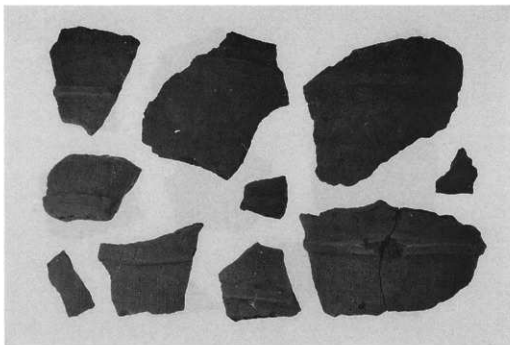


写真15 2号トレンチ出土遺物(2)

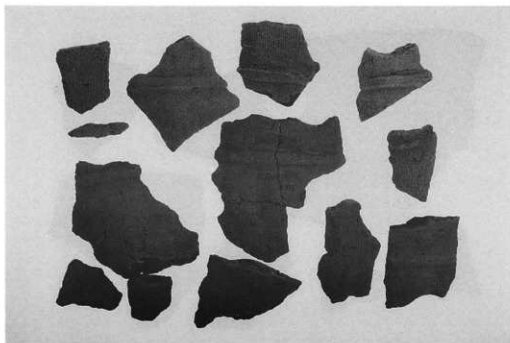


写真16 2号トレンチ出土遺物(3)

第3節 南美國町遺跡(みなみみそのちょういせき)

位置と環境および周辺の遺跡

南美國町遺跡は、館林市の南部、東武鉄道伊勢崎線茂林寺前駅の北東約900mに位置する。地形的には、蛇沼から北西に延びる開折谷の北の台地に立地する。遺跡地の標高はおよそ20m内外で蛇沼に連なる低地帯との比高差は+2mを計る。

散布する遺物は、縄文時代・平安時代のものであり、現地での聴き取りでは、かつて完形の土器が出土したという話もある。遺跡地を含む南美國町遺跡一帯は既に区画整理が終了しており、遺跡地内の多くは宅地化されている。しかし遺跡地内の既往の発掘調査の例はなく、遺物の散布状況と区画整理に伴う土地の人工改変(破壊状況)との相関関係は明確でない。

蛇沼周辺の遺跡としては、本遺跡の他に間堀1遺跡・大原道東遺跡が存在する。

大原道東遺跡に散布する遺物は、縄文時代の中～晩期のものであり、昭和56年度実施の発掘調査では住居址は検出されなかったものの同時代の遺物が多数出土している。

間堀1遺跡に散布する遺物は、縄文時代前～中期・平安時代のものであり、昭和57年度実施の発掘調査では、縄文時代前期の住居址が1軒、同時期の遺物集中箇所5基、中期の住居址が6軒、同時期の貯蔵穴と考えられる土坑2基、遺物集中箇所1基、時期不明の集石土坑1基が検出されている。



写真17 調査地遠景

調査に至る経過・内容

館林市南美園町6-4番地は、地権者瀬山儀一氏より、有限会社渡辺造園が樹木の栽培用地として賃借している土地であり、樹木の植え代えの際に多量の土器片が出土された。報告と取り扱いの照会を受けた市教育委員会では現地を確認するとともに地権者・土地利用者と協議を開始した。

現地を確認したところ、当該地番の付近の遺物分布は濃く、表土は埋土と思われるが、ボーリングステッキで調べたところ厚さは50cm内外であり、樹木の植え代え作業は遺構が存在する場合破壊してしまうものと考えられる。

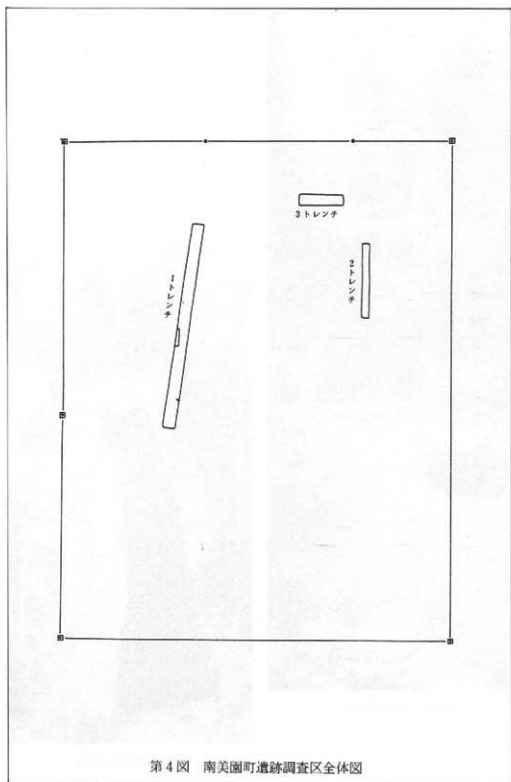
以上のことを基に再協議を行い、確認調査を実施して遺構の存否と区画整理による破壊状況を確認するものとし、遺構が存在する場合は再協議するものとして了解を得た。

調査は、区域内に任意の試掘溝(幅1.5m)を掘り、遺構の検出を図るとともに、土層状況から遺跡の破壊状況の確認を試みた。この結果、地表下約60cmの深さでローム面に達した。この面はハードローム層であり、ソフトロームより上部層は削られ、その上に現地表の埋土を盛ったものであることが判明した。出土遺物は多く総量はバンケース1箱分にもなる。時期は縄文時代中期(加曾利E式)のものが多し。

以上のことにより、本遺跡内で遺構が残存する可能性があるのは、低地寄りの部分のみと思われる。



写真18 調査風景



第4図 南美園町遺跡調査区全体図

写真20 2号トレンチ



写真19 1号トレンチ





写真21 3号トレンチ

参 考 文 献

- 館林市教育委員会「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書」第1集～第17集
館林市教育委員会 同第18集「館林市の遺跡—館林市遺跡詳細分布調査報告書—」(1988)
館 林 市 『館林市誌 自然篇』(1966)
館 林 市 『館林市誌 歴史篇』(1969)
群馬県教育委員会『群馬県遺跡台帳東毛編』(1973)
群 馬 県 『群馬県史 資料編2 原始古代2 弥生・土師』(1986)
板 倉 町 『板倉町史 通史 上巻』(1985)
館林市教育委員会『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第1集』(1985)
館林市教育委員会『茂林寺沼及び低地湿原調査報告書第2集』(1986) その他

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第19集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館 林 市 教 育 委 員 会

印 刷 所 中 塚 印 刷 所

発行年月日 平成元年 3 月 3 1 日



文化財保護シンボルマーク
ふるいの文化と歴史を貫くおもう